



地人館
E-books

デモ版 pdf

賢治は笑える
愉快な童話集

宮沢賢治コミカル童話選 I

大角 修 編著



はじめに ユーモラスな宮沢賢治

宮沢賢治（1896～1933年）は「雨ニモマケズ」の印象とは異なり、実際には、ジョーク好きで、ほがらかな人だったようである。作品にもユーモラスなものが多い。有名な童話「銀河鉄道の夜」にも、プリオシン海岸の化石掘りの大学士とか、銀河の鳥捕りとか、けったいな人物が登場する。なかでもユーモラスな作品を集めたのが本書である。コミカルともいえる作品群なので、書名を『コミカル童話選』とした。

賢治作品がユーモラスであることは早くから指摘されていて「宮沢賢治のユーモア」といった論もあるのだが、ともかく、作品を読んでみるのがいちばんである。

しかし、もう百年も前に書かれた作品なので、今ではわかりにくくなった語句も多い。また、賢治自身が謎めいた言葉を散りばめて、そこから展開するイメージは読者にゆだねているところがある。それも今の読者にはわかりにくい。賢治の作品に興味をもって読もうとする人は多いのだが、そうした点が壁になって、読みにくいし、読んでも何のことかわからなかったという人もある。

そこで本書では、現代表記に改められている「宮沢賢治コレクション」シリーズを用いたうえ、

作品の本文を区切ってコメントを挿入した。作品の途中に入れたコメントを煩わしいと感じる方もおられると想像されるが、ひとつの試みとしてご容赦いただきたい。

ともあれ賢治のユーモラスな作品を楽しんでいただき、その作品の全体を読むことを通して、単にコミカルだけではないところも味わっていただければ幸いである。

【目次】より

はじめに ユーモラスな宮沢賢治

山男の四月 ❖ 「こころの種子」はどこに？

紫紺染について ❖ 東京大博覧会受賞秘話

北守将軍と三人兄弟の医者 ❖ 北方守備軍ソンバーユー将軍の帰還

フランドン農学校の豚 ❖ 友愛と平和の情操を涵養するために

どんぐりと山猫 ❖ 森の中の草地の思い出

おわりに いつか秋の日に

以下は「Ⅱ」所収

よく利く薬とえらい薬 ◆野バラの実の話

「ツエ」ねずみ ◆暴露する者の末路

鳥箱先生とフウねずみ ◆虚妄の果てに

クンねずみ ◆ネズミは猫に食われる

とつこべとら子 ◆狐に化かされた話

蜘蛛となめくじと狸 ◆ゴールは地獄だ

おわりに 宮沢賢治の文学と信仰

フランドン農学校の豚 ◆友愛と平和の情操を涵養するために

現在の日本には「動物の愛護及び管理に関する法律（動物愛護管理法）」という法律がある。昭和48年（1973）に議員立法で制定された。その目的は第一条に次のように記されている。

第一条 この法律は、動物の虐待及び遺棄の防止、動物の適正な取扱いその他動物の健康及び安全の保持等の動物の愛護に関する事項を定めて国民の間に動物を愛護する気風を招来し、生命尊重、友愛及び平和の情操の涵養かんように資するとともに、動物の管理に関する事項を定めて動物による人の生命、身体及び財産に対する侵害並びに生活環境の保全上の支障を防止し、もつて人と動物の共生する社会の実現を図ることを目的とする。

この法律の愛護の対象は家庭動物（ペット）、産業動物（畜産動物）など「人の飼養に係る動物」である。ペットの犬や猫はともかく、牛や豚などは食用に飼われている家畜なのだから、「生命尊重、

友愛及び平和の情操の涵養」とか「人と動物の共生」といった文言は大きすぎて、国家の法律であるにもかかわらず、いささかコミカルではあるまいか。

ところが、この物語のフランドンは、もつと先を進んでいる。家畜撲殺同意調印法があり、家畜を屠殺するときは当の家畜から承諾書をもらわねばならないのである。

〔冒頭部原稿何枚か破棄〕

以外の物質は、みなすべて、よくこれを摂取して、脂肪若くは蛋白質となし、その体内に蓄積す。」とこう書いてあったから、農学校の畜産の、助手や又小使などは金石でないものならばどんなものでも片つ端から、持つて来てほうり出したのだ。

尤もこれは豚の方では、それが生まれつきなのだし、充分によくなっていたから、けしていやだとも思わなかった。却つてある夕方などは、殊に豚は自分の幸福を、感じて、天上に向いて感謝していた。というわけはその晩方、化学を習った一年生の、生徒が、自分の前に来ていかにも不思議そうにして、豚のからだを眺めて居た。豚の方でも時々は、あの小さなそら豆形の怒つたような眼をあげて、そちらをちらちら見ていたのだ。その生徒が云つた。

「ずいぶん豚というものは、奇体なことになっている。水やスリッパや藁をたべて、それをいちばん上等な、脂肪や肉にこしらえる。豚のからだはまあたとえば生きた一つの触媒だ。白金と同じことなのだ。無機体では白金だし有機体では豚なのだ。考えれば考える位、これは変になるこ

とだ。」

豚はもちろん自分の名が、白金と並べられたのを聞いた。それから豚は、白金が、一匁もんめ三十円かんすることを、よく知っていたものだから、自分のからだは二十貫かんで、いくらになるということも勘定かんじょうがすぐ出来たのだ。豚はびたつと耳を伏せ、眼を半分だけ閉じて、前肢まえあしをきくつと曲げながらその勘定をやったのだ。

$20 \times 1000 \times 30 \parallel 600000$ 実に六十万円だ。六十万円といったならそのころのフランドンあたりでは、まあ第一流の紳士しんしなのだ。いまだってそうかも知れない。さあ第一流の紳士だもの、豚がすっかり幸福を感じ、あの頭のかげの方の鮫さめによく似た大きな口を、にやにや曲げてよろこんだのも、けして無理とは云われない。

1匁は3・75gである。1貫は10000匁で、3・75kgである。

この豚の体重は20貫だから、 20×10000 で200000匁。これに1匁30円の白金の値段を掛けると、60万円になる。そのころのフランドンが、いつの時代のどこなのかは不明だが、90万円は相当な大金で、自分がそれくらい値段なら「第一流の紳士なのだ」と豚は喜んだ。

豚のからだは「水やスリッパや藁をたべて」「脂肪や肉にこしらえる」ので、触媒の白金のような働きをする。だったら、豚のからだは白金だという飛躍した論理による計算だが、豚は「前肢をきくつ」と曲げて指折り数えることのできないからだで、この計算をやったのけたのだ。

なお、この物語は「小さなそら豆形の怒ったような眼」など、豚の体の表現がユニークかつ正確である。

ところが豚の幸福も、あまり永くは続かなかった。

それから二三日たって、そのフランドンの豚は、どきりと上から落ちて来た一かたまりのたべ物から、(大学生諸君、意志を鞏固にもち給え。いいかな。)たべ物の中から、一寸細長い白いもので、さきにもじかい毛を植えた、ごく率直に云うならば、ラクダ印の歯磨楊子、それを見たのだ。どうもいやな説教で、折角洗礼を受けた、大学生諸君にすまないが少しこらえてくれ給え。

豚は実にぎよつとした。一体、その楊子の毛をみると、自分のからだ中の毛が、風に吹かれた草のよう、ザラツザラツと鳴つたのだ。豚は実に永い間、変な顔して、眺めていたが、とうとう頭がくらくらして、いやないやな気分になった。いきなり向こうの敷藁に頭を埋めてくるつと寝てしまったのだ。

豚に餌をやりながら、農学校の先生が学生に豚の屠殺法か何かを講義しているらしい。意志を鞏固にもって、それを実行しなければならぬ。洗礼を受けて全てに愛を誓った大学生諸君には酷な話だ。

それより、ラクダ印の歯磨楊子(歯ブラシ)である。歯ブラシには、豚の毛が植えられているよ

うなのだ。それを見た豚は、自分のからだ中の毛がザラツザラツと鳴つたのだった。

晩方になり少し気分がよくなつて、豚はしずかに起きあがる。気分がいいと云つたつて、結局豚の気分だから、苹果りんごのようにさくさくし、青ぞらのように光るわけではもちろんない。これ灰色の気分である。灰色にしてややつめたく、透明なところの気分である。さればまことに豚の心もちをわかるには、豚になつて見るより致いたし方ない。

外来ヨークシャイヤでも又また黒いバアクシャイヤでも豚は決して自分が魯鈍ろどんだとか、怠惰たいただとかは考えない。最も想像に困難なのは、豚が自分の平らなせなかを、棒でどしやつとやられたとき何と感ずるかということだ。さあ、日本語だろうか伊太利亞語イタリアだろうか独乙語ドイツだろうか英語だろうか。さあどう表現したらいいか。さりながら、結局は、叫び声以外わからない。カント博士と同様に全く不可知なのである。

豚の心は豚でなくてはわからない。背中を棒でぶたれたときの声も、人間の言語に翻訳することはできず、叫び声にしか聞こえない。カント博士の哲学と同様にわからない。

さて豚はずんずん肥かどり、なんべんも寝たり起きたりした。フランドン農学校の畜産学の先生は、毎日来ては鋭い眼で、じつとその生体量を、計算しては歸つて行つた。

「も少しきちんと窓をしめて、室中暗くしなくては、脂がうまくかからんじやないか。それにもうそろそろと肥育をやってもよからうな、毎日阿麻仁を少しずつ置いて呉れないか。」教師は若い水色の、上着の助手に斯う云った。豚はこれをすっかり聴いた。そして又大へんいやになった。楊子のときと同じだ。折角のその阿麻仁も、どうもうまく咽喉を通らなかつた。これらはみんな畜産の、その教師の語気について、豚が直覚したのである。(とにかくあいつら二人は、おれにたべものはよこすが、時々まるで北極の、空のような眼をして、おれのからだをじつと見る、実に何ともたまらない、とりつきはもまないようなきびしいところで、おれのことを考えている、そのことは恐い、ああ、恐い。) 豚は心に思いながら、もうたまらなくなり前の柵を、むちやくちやに鼻で突つ突いた。

阿麻仁は茎から麻をとるために栽培されるアマの種子である。その種子から食用油の阿麻仁油がとれるように栄養価が高い。よって、豚の肥育用の飼料に用いるというわけだ。

養豚がいよいよ肥育の段階に入ると、屠殺は近い。教師と助手の目つきも変わってきた。豚はたまらなく恐くなった。

ところが、丁度その豚の、殺される前の月になって、一つの布告がその国の、王から発令されていた。

それは家畜撲殺同意調印法といい、誰でも、家畜を殺そうというものは、その家畜から死亡承諾書を受け取るしよたたくしよこと、又その承諾証書には家畜の調印を要すると、こう云う布告だったのだ。さあそこでその頃は、牛でも馬でも、もうみんな、殺される前の日には、主人から無理に強いられて、証文にベタリと印を押したもんだ。ごくとしよりの馬などは、わざわざ蹄鉄ていてつをはずされて、ぼろぼろなみだをこぼしながら、その大きな判をばたつと証書に押したのだ。

フランドンのヨークシャイヤも又活版刷りに出来ているその死亡証書を見た。見たというのは、或る日のこと、フランドン農学校の校長が、大きな黄色の紙を持ち、豚のところによつて来た。豚は語学も余程進んでいたのだし、又實際豚の舌は柔らかなで素質も充分あったのでごく流暢な人間語で、しずかに校長に挨拶した。

「校長さん、いいお天気でございます。」

フランドン農学校の豚はヨークシャー種であるらしい。18世紀にイギリスのヨークシャーで精肉用の品種として創出された。飼育しやすく肉の味がよいということで20世紀には世界中で飼育されるようになった白い豚である。

このフランドン農学校の豚は優秀なヨークシャー種であるだけに、頭がよくて人間語を流暢に話すうえ、繊細な感情の持ち主だ。その豚も自分の死亡承諾書を見る日が来た。王の勅令による重要な証書なので、農学校の校長がみずから持つて来たのだ。

校長はその黄色な証書をだまつて小わきにはさんだまま、ポケットに手を入れて、にがわらいして斯う云った。

「うんまあ、天気はいいね。」

豚は何だか、この語が、耳にはいつて、それから咽喉につかえたのだ。おまけに校長がじろじろと豚のからだを見ることは全くあの畜産の、教師とおんなじことなのだ。

豚はかなしく耳を伏せた。そしてこわごわ斯う云った。

「私はどうも、このごろは、気がふさいで仕方ありません。」

校長は又にがわらいを、しながら豚に斯う云った。

「ふん。気がふさぐ。そうかい。もう世の中がいやになつたかい。そういうわけでもないのかい。」
豚があんまり陰気な顔をしたものだから校長は急いで取り消しました。

それから農学校長と、豚とはしばらくしいんとしてにらみ合つたまま立っていた。ただ一言も云わないでじいつと立って居つたのだ。そのうちにとうとう校長は今日は証書はあきらめて、

「とにかくよくやすんでおいで。あんまり動きまわらんでね。」例の黄いろな大きな証書を小わきにかいこんだまま、向こうの方へ行つてしまふ。

豚はそのあとで、何べんも、校長の今の苦笑やいかにも底意のある語を、繰り返し繰り返し見て、身ぶるいしながらひとりごとした。

『とにかくよくやすんでおいで。あんまり動きまわらんでね。』一体これはどう云う事か。あつらいつらい。豚は斯う考えて、まるであの梯形の、頭も割れるように思った。おまけにその晩は強いふぶきで、外では風がすさまじく、乾いたカサカサした雪のかけらが、小屋のすきまから吹きこんで豚のたべもの余りも、雪でまっ白になったのだ。

校長は死亡承諾書を持って来たが、「天気がいいね」といった話だけして、豚に承諾印を押してほしいとは言えずに帰っていった。

ところが次の日のこと、畜産学の教師が又やって来て例の、水色の上着を着た、顔の赤い助手といつものするどい眼付して、じつと豚の頭から、耳から背中から尻尾まで、まるでまるで食い込むように眺めてから、尖った指を一本立てて、

「毎日阿麻仁をやつてあるかね。」

「やつてあります。」

「そうだろう。もう明日だつて明後日だつて、いいんだから。早く承諾書をどれあいなんだ。どうしたんだらう、昨日校長は、たしかに証書をわきに挟んでこつちの方へ来たんだが。」

「はい、お入りのようでした。」

「それではもうできてるかしら。出来ればすぐよこす筈だがね。」

「はあ。」

「も少し室をくらくして、置いたらどうだろうか。それからやる前の日には、なんにも飼料をやらんでくれ。」

「はあ、きつとそう致します。」

畜産の教師は鋭い目で、もう一遍じいつと豚を見てから、それから室を出て行った。

校長があきらめても、王の勅令の家畜撲殺同意調印法に背くわけにはいかない。飼育者である農学校の誰かが豚の印をもらわなければならぬし、豚も承諾印を押さねばならない。

こうなると、動物愛護の精神にかなうことなのかどうか。豚の苦惱は深まるばかりだ。

そのあとの豚の煩悶さ、(承諾書というのは、何の承諾書だろう何を一体しろと云うのだ、やる前の日には、なんにも飼料をやっちゃいけない、やる前の日って何だろう。一体何をされるんだらう。どこか遠くへ売られるのか。ああこれはつらいつらい。)豚の頭の割れそうなのは、ことはこの日も同じだ。その晩豚はあんまりに神経が興奮し過ぎてよく眠ることができなかつた。ところが次の朝になって、やっと太陽が登った頃、寄宿舎の生徒が三人、げたげた笑って小屋へ来た。そして一晩睡らないで、頭のしんしん痛む豚に、又もや厭な会話を聞かせたのだ。

「いつだろうなあ、早く見たいなあ。」

「僕は見たくないよ。」

「早いといいなあ、囲って置いた葱だつて、あんまり永いと凍つちまう。」

「馬鈴薯もしまつてあるだろう。」

「しまつてあるよ。三斗しまつてある。とても僕たちだけで食べられるもんか。」

「今朝はぜひぶん冷たいねえ。」一人が白い息を手に吹きかけながら斯う云いました。

「豚のやつは暖かそうだ。」一人が斯う答えたら三人共どつとふき出しました。

「豚のやつは脂肪でできた、厚さ一寸の外套を着てるんだもの、暖かいさ。」

「暖かそうだよ。どうだ。湯気さえほやほやと立っているよ。」

豚はあんまり悲しくて、辛くてよろよろしてしまふ。

「早くやつちまえばいいな。」

農学校では肥育した豚を学校で食べるようだ。季節は冬だ。豚肉料理に使うネギは藁で巻いて凍らないようにしてある。馬鈴薯（じゃがいも）は3斗も用意してある。生徒たちは早く食べたくてしかたがない。豚のからだからたつ湯気さえ、温かい鍋の湯気のように思われてくるのだ。

三人はつぶやきながら小屋を出た。そのあとの豚の苦しき、（見たい、見たくない、早いといい、葱が凍る、馬鈴薯三斗、食いきれない。厚さ一寸の脂肪の外套、おお恐い、ひとのからだをまる

で観透みとおしてるおお恐い。恐い。けれども一体おれと葱と、何の関係があるだろう。ああつらいなあ。」
その煩悶はんもんの最中に校長が又やって来た。入口でばたばた雪を落として、それから例のあいまいな苦笑をしながら前に立つ。

「どうだい。今日は気分がいいかい。」

「はい、ありがとうございます。」

「いいのかい。大へん結構けつこうだ。たべ物は美味おいしいかい。」

「ありがとうございます。大へんに結構けつこうでございます。」

「そうかい。それはいいね、ところで実は今日はお前と、内内相談ないないに来たのだがね、どうだ頭ははっきりかい。」

「はあ。」豚は声がかすれてしまう。

「実はね、この世界に生きてるものは、みんな死ななけあいかんのだ。実際もうどんなんでも死ぬんだよ。人間の中の貴族でも、金持でも、又私のような、中産階級でも、それからごくつまらない乞食こじきでもね。」

「はあ、」豚は声が咽喉のどにつまって、はつきり返事ができなかった。

「また人間でない動物でもね、たとえば馬でも、牛でも、鶏にわとりでも、なまずでも、バクテリアでも、みんな死ななけあいかんのだ。蜚蜮かげろうのごときはあしたに生れ、夕ゆふべに死する、ただ一日の命なのだ。みんな死ななけあならないのだ。だからお前も私もいつか、きつと死ぬのにきまつてる。」

「はあ。」豚は声がかすれて、返事もなにもできなかつた。

「そこで実は相談だがね、私たちの学校では、お前を今日まで養つて来た。大したこともなかつたが、学校としては出来るだけ、ずいぶん大事にしたはずだ。お前たちの仲間もあちこちに、ずいぶんあるし又私も、まあよく知っているのだが、でそう云つちや可笑しいが、まあ私の処ぐらい、待遇のよい処はない。」

「はあ。」豚は返事しようと思つたが、その前にたべたものが、みんな咽喉へつかえててどうしても声が出て来なかつた。

「でね、実は相談だがね、お前がもしも少しでも、そんなようなことが、ありがたいと云う気がしたら、ほんの小さなたのみだが承知をしては貰えまいか。」

「はあ。」豚は声がかすれて、返事がどうしてもできなかつた。

「それはほんの小さなことだ。ここに斯う云う紙がある、この紙に斯う書いてある。死亡承諾書、私儀永々御恩顧の次第に有之候儘、御都合により、何時にても死亡仕るべく候。年月日フランドン畜舎内、ヨークシャイヤ、フランドン農学校長殿 とこれだけのことだがね、」校長はもう云い出したので、一瀉千里にまくしかけた。

「つまりお前はどうせ死ななけあいかないからその死ぬときはもう潔く、いつでも死にますと斯う云うことで、一向何でもないことさ。死ななくてもいいうちは、一向死ぬことも要らないよ。ここの処へただちよつとお前の前肢の爪印を、一つ押しておいて貰いたい。それだけのことだ。」

豚は眉を寄せて、つきつけられた証書を、じつとしばらく眺めていた。校長の云う通りなら、何でもないがつくづくと証書の文句を読んでいると、まったく大へんに恐かった。とうとう豚はこらえかねてまるで泣声でこう云った。

「何時にてもということば、今日でもということばですか。」

校長はぎくつとしたが気をとりなおしてこう云った。

「まあそうだ。けれども今日だなんて、そんなことは決してないよ。」

「でも明日でもというんでしょう。」

「さあ、明日なんていうようそんな急でもないだろう。いつでも、いつかというような、ごくあまいなことなんだ。」

「死亡をするということは私が一人で死ぬのですか。」豚は又金切声で斯うきいた。

「うん、すっかりそうでもないな。」

「いやです、いやです、そんならいやです。どうしてもいやです。」豚は泣いて叫んだ。

「いやかい。それでは仕方ない。お前もあんまり恩知らずだ。犬猫にさえ劣つたやつだ。」校長はぶんぶん怒り、顔をまっ赤にしてしまい証書をポケットに手早くしまい、大股に小屋を出て行った。

「どうせ犬猫なんかには、はじめから劣つていきますよう。わあ」豚はあんまり口惜しさや、悲しさが一時にこみあげて、もうあらんかぎり泣きだした。けれども半日ほど泣いたら、二晩も眠ら

なかつた疲れが、一ぺんにどつと出て来たのでつい泣きながら寝込んでしまふ。その睡りの中でも豚は、何べんも何べんもおびえ、手足をぶるつと動かした。

校長がまた死亡承諾書を持つて来た。「天氣がいいね」から始めて「この世界に生きてるものは、みんな死ななけあいかんのだ」と説得し、とうとう豚の前肢の爪印を承諾書に押してもらいたいと切り出した。

しかし、豚が「爪印を押しして承諾したら、今日、明日にでも死ななければならぬのか」と怯えると、校長も気弱になつて「そんな急でもないだろう」とごまかし、ぶんぶん怒つてはみたが、証書をボケツトにしまつて家畜小屋を出ていった。また失敗だ。

ところがその次の日のことだ。あの畜産の担任が、助手を連れて又やつて来た。そして例のたまらない、目付きで豚をながめてから、大へん機嫌の悪い顔で助手に向かつてこう云つた。「どつしたんだい。すてきに肉が落ちたじゃないか。これじゃまるきり話にならん。百姓のうちで飼つたつてこれ位にはできるんだ。一体どうしたてんだらう。心当りがつかないかい。頬肉なんかあんまり減つた。おまけにシヨウルダアだつて、こんなに薄くちやなつてない。品評会へも出せあしない。一体どうしたてんだらう。」

助手は唇へ指をあて、しばらくじつと考えて、それからぼんやり返事した。

「さあ、昨日の午后に校長が、おいでになったただけでした。それだけだったと思います。」

畜産の教師は飛び上る。

「校長？　そうかい。校長だ。きつと承諾書を取ろうとして、すてきなぶま〈不間・へま〉をやったんだ。おじけさせちゃったんだな。それでこいつはぐるぐるして昨夜一晩寝ないんだな。まずいことになったなあ。おまけにきつと承諾書も、取り損ねたにちがいない。まずいことになったなあ。」

教師は実に口惜しそうに、しばらくキリキリ歯を鳴らし腕を組んでから又云った。

「えい、仕方ない。窓をすっかり明けて呉れ。それから外へ連れ出して、少し運動させるんだ。む茶くちやにたたいたり走らしたりしちやいけないぞ。日の照らない処を、厩舎の陰のあたりの、雪のない草はらを、そろそろ連れて歩いて呉れ。一回十五分位、それから飼料をやらないうで少し腹を空かせてやれ。すっかり気分が直ったらキャベジのいい処を少しやれ。それからだんだん直ったら今まで通りにすればいい。まるで一ヶ月の肥育を、一晩で台なしにしちまった。いいかい。」

「承知いたしました。」

教師は豚が痩せてしまったことにかっかりしたが、さすが畜産の専門家である。すぐに対策を考えたのだ。

教師は教員室へ帰り豚はもうすっかり気落ちして、ぼんやりと向こうの壁かべを見る、動きも叫びもしたくない。ところへ助手が細い鞭むちを持って笑って入って来た。助手は囲いの出口をあけごく町寧ちやうねいに云ったのだ。

「少しご散歩はいかがです。今日は大へんよく晴れて、風もしずかでございます。それではお供いたしましょう。」ピシッと鞭がせなかに来る、全くこいつはたまらない、ヨークシャイヤは仕方なくのそのそ畜舎を出たけれど胸は悲しさでいっぱい、歩けば裂けるようだった。助手はのんきにうしろから、チツペラリーの口笛を吹いてゆっくりやって来る。鞭もぶらぶらふついている。

全体何がチツペラリーだ。こんなにわたしはかなしいのにと豚は度々たびたび口をまげる。時々は「ええもう少し左の方を、お歩きなさいましては、いかがでございますか。」なんて、口ばかりうまいことを云いながら、ピシッと鞭を呉れたのだ。（この世はほんとうにつらい、本当に苦の世界なのだ。）こてつとぶたれて散歩しながら豚はつくづく考えた。

「さあいかがです、そろそろお休みなさいませ。」助手は又一つピシッとやる。ウルトラ大学生諸君、こんな散歩が何で面白おもしろいだろう。からだの為も何もあつたもんじやない。

豚は仕方なく又畜舎に戻りごろつと藁わらに横になる。キャベジの青い所を助手はわずか持つて来た。豚は喰たべたくなかったが助手が向こうに直立して何とも云えない恐い眼で上からじつと待っている、ほんとうにもう仕方なく、少しそれを嘔かじるふりしたら助手はやっと安心して一つ「ふん。」と笑ってからチツペラリーの口笛を又吹きながら出て行った。いつか窓がすっかり

明け放してあったので豚は寒くて耐らなかつた。

チップペラリーは第一次世界大戦時（1914～1918年）にイギリス陸軍が行進中に歌つたことから流行した歌曲。原名は「It's a Long Way to Tipperary（遙かなるティペラリー）」

こんな工合ぐあいにヨークシャイヤは一日思いに沈みながら三日を夢のように送る。

四日目に又畜産よちかの、教師が助手とやって来た。ちらつと豚を一眼見て、手を振りながら助手に云う。

「いけないいけない。君はなぜ、僕の云つた通りしなかつた。」

「いいえ、窓もすっかり明けましたし、キャベジのいいのもやりました。運動も毎日丁寧ていねいに、十五分ずつやらしています。」

「そうかね、そんなにまでもしてやって、やつぱりうまくいかないかね、じゃもうこいつは瘠やせる一方なんだ。神経性營養不良なんだ。わきからどうも出来やしない。あんまり骨と皮だけに、ならないうちにきめなくちゃ、どこまで行くかわからない。おい。窓をみなしめて呉れ。そして肥育器とくちきを使うとしよう、飼料をどしどし押し込んで呉れ。麦のふすまを二升とね、阿麻仁あまにを二合それから玉蜀黍とうもろこしの粉を、五合を水でこねて、団子だんごにこさえて一日に、二度か三度ぐらいに分けて、肥育器にかけて呉れ給え。肥育器はあつたらう。」

「はい、ござります。」

「こいつは縛しばって置き給たまえ。いや縛しばる前に早く承諾書をとらなくちゃ。校長もさっぱり拙ずいなあ。」
畜産の教師は大急ぎで、教舎の方へ走って行き、助手もあとから出て行った。

畜産の教師は、気弱な校長に強く申し入れに行ったようだ。

間もなく農学校長が、大へんあわててやって来た。豚は身体からだの置き場もなく鼻しきどろで敷ほを掘ほったのだ。

「おおい、いよいよ急がなきゃならないよ。先頃せんころの死亡承諾書ね、あいつへ今日はどうしても、爪判つめはんを押して貰もらいたい。別に大した事じゃない。押して呉くれれ。」

「いやですいやです。」豚は泣く。

「厭いやだ？ おい。あんまり勝手を云うんじゃない、その身体からだは全体みんな、学校のお陰で出来たんだ。これからだって毎日麦のふすま二升阿麻仁二合と玉蜀黍とうもろこしの、粉五合ずつやるんだぞ、さあいい加減に判をつけ、さあつかないか。」

なるほど斯こう怒り出して見ると、校長なんというものは、実際恐いものなんだ。豚はすっかりおびえてしし、

「つきます。つきます。」と、かすれた声で云ったのだ。

「よろしい、では。」と校長は、やつとすることに機嫌きげんを直し、手早くあの死亡承諾書の、黄いろな紙をとり出して、豚の眼の前にひろげたのだ。

「どこへつけばいいんですか。」豚は泣きながら尋ねた。

「ここへ。おまえの名前の下へ。」校長はじつと眼鏡めがね越しに、豚の小さな眼を見て云った。豚は口をびくびく横に曲げ、短い前の右肢みぎあしを、きくつと挙げてそれからピタリと印をおす。

これで豚の命もピタリと閉ざされた。

「うはん。よろしい。これでいい。」校長は紙を引っぱって、よくその判を調べてから、機嫌を直してこう云った。戸口で待っていたらしくあの意地わるい畜産の教師がいきなりやつて来た。

「いかがです。うまく行きましたか。」

「うん。まあできた。ではこれは、あなたにあげて置きますから。ええ、肥育は何日ぐらいかね、「さあいずれ模様を見まして、鶏にわとりやあひるなどですと、きつと間違まちがいなく肥ふとりますが、斯こう云う神経過敏な豚は、或あるは強制肥育では甘うまく行かないかも知れません。」

「そうか。なるほど。とにかくしつかりやり給え。」

そして校長は帰って行つた。今度は助手が変てこな、ねじのついたズツクの管くだと、何かのバケツを持って来た。畜産の教師は云いながら、そのバケツの中ちゆうちゆうのものを、一寸ちゆうとんつままで調べて見た。

「そいじゃ豚を縛しばつて呉れ。」助手はマニラロープを持つて、囲いの中に飛び込んだ。豚はばたばた暴れたがとうとう囲いの隅にある、二つの鉄の環わに右側の、足を二本共縛しばられた。

「よろしい、それではこの端はしを、咽喉のどへ入れてやつて呉れ。」畜産の教師は云いながら、ズツクの管を助手に渡す。

「さあ口をお開ひらきなさい。さあ口を。」助手はしずかに云ったのだが、豚は堅かたく歯を食いしぱり、どうしても口をあかなかつた。

「仕方ない。こいつを囓かましてやつて呉れ。」短い鋼はがねの管を出す。

助手はぎしぎしその管を豚の歯の間にねじ込んだ。豚はもうあらんかぎり、怒鳴どなったり泣いたりしたが、とうとう管をはめられて、咽喉のどの底だけで泣いていた。助手はその鋼の管の間から、ズツクの管を豚の咽喉まで押し込んだ。

「それでよろしい。ではやろう。」教師はバケツの中のを、ズツク管の端じゆうびの漏斗に移して、それから変な螺旋らせんを使い食物を豚の胃に送る。豚はいくら吞のむまいとしても、どうしても咽喉で負けてしまい、その練ねったものが胃の中に、入って腹が重くなる。これが強制肥育だった。豚の気持ちの悪いこと、まるで夢中で一日泣いた。

次の日教師が又また来て見た。

「うまい、肥ふとった。効果がある。これから毎日小使こづかいと、二人で二度ずつやつて呉れ。」

こんな工合ぐあいでそれから七日というものは、豚はまるきり外で日が照っているやら、風が吹いて

るやら見当もつかず、ただ胃が無暗に重苦しくそれからいやに頬や肩が、ふくらんで来ておしまいは息をするのもつらいくらい、生徒も代わる代わる来て、何かいろいろ云っていた。

口に管を入れて餌を食べさせる強制給餌はフランスでガチヨウやアヒルを太らせて肝臓を脂肪肝にして肥大させる方法として開発された。その脂肪肝が高級食材のフォアグラだ。フランス料理が宮廷で発達して世界に冠たる美食になった陰には、強制肥育させられたガチヨウやアヒルの献身があった。そしてフランドン農学校の豚にもフォアグラ生産の技法が適用されたのだ。

ちなみにヨーロッパでは、強制給餌は動物福祉に反するとしてフォアグラの生産と販売を禁止する動きもあるそうだ。はたして人間は、動物に犠牲を強いる畜産をこのまま続けていいものかどうか。

この問題については、シカゴ畜産組合の技師とビジテリアンの神学者らがおこなったデイベート
を宮沢賢治が「ビジテリアン大祭」に詳細に書きとめているので、そちらをご参照したい。

あるときは生徒が十人ほどやって来てがやがや斯う云った。

「ずいぶん大きくなったなあ、何貫ぐらいあるだろう。」

「さあ先生なら一目見て、何百目まで云うんだが、おれたちじゃちよつとわからない。」

「比重がわからないからなあ。」

「比重はわかるさ比重なら、大抵水と同じだろう。」

「どうしてそれがわかるんだい。」

「だって大抵そうだろう。もしもこいつを水に入れたらきつと沈みも浮かびもしない。」

「いいやたしかに沈まない、きつと浮かぶにきまつてる。」

「それは脂肪のためだろう、けれど豚にも骨はある。それから肉もあるんだから、たぶん比重は一ぐらいいだ。」

「比重をそんなら一として、こいつは何斗あるだろう。」

「五斗五升はあるだろう。」

「いいや五斗五升などじゃない。少く見ても八斗ある。」

「八斗なんかじゃきかないよ。たしかに九斗はあるだろう。」

「まあ、七斗としよう。七斗なら水一斗が五貫だから、こいつは丁度三十五貫。」

「三十五貫はあるな。」

こんなはなしを聞きながらどんなに豚は泣いたろう。なんでもこれはあんまりひどい。ひとのからだを舁ますではかる。七斗だの八斗だのという。

畜産においては、家畜の価値は体重に尽きるのだ。

そうして丁度七日目に又あの教師が助手と二人、並んで豚の前に立つ。

「もういいようだ。丁度いい。この位まで肥ったらまあ極度だろう。この辺だ。あんまり肥育をやり過ぎて、一度病気にかかってもまたあとまわりになるだけだ。丁度あしたがいいだろう。今日はもう飼(えさ)をやらんでくれ。それから小使と二人してからだをすっかり洗って呉れ。敷藁(しきわら)も新らしくしてね。いいか。」

「承知いたしました。」

豚はこれらの問答を、もう全身の勢力で耳をすまして聴いて居た。(いよいよ明日だ、それがあの、証書の死亡ということか。いよいよ明日だ、明日なんだ。一体どんな事だろう、つらいつらい。) あんまり豚はつらいので、頭をゴツゴツ板へぶつつけた。

ここで読者は、思わぬなりゆきで豚が助かることを期待するのではないだろうか。そうでなければ、豚があまりに可哀想だ。しかし宮沢賢治は、盛岡高等農林(現在の岩手大学農学部)を卒業し、花巻農学校の教師でもあった。そんな甘い結末は用意していない。

そのひるすぎに又助手が、小使と二人やって来た。そしてあの二つの鉄環(てつわ)から、豚の足を解いて助手が云う。

「いかがです、今日は一つ、お風呂をお召(め)しなさいませ。すっかりお仕度(しど)ができて居ます。」

豚がまだ承知とも、何とも云わないうちに、鞭がピシッとやって来た。豚は仕方なく歩き出したが、あんまり肥ってしまったので、もううごくことの大儀なこと、三足で息がはあはあした。

そこへ鞭がピシッと来た。豚はまるで潰れそうになりそれでもようよう畜舎の外まで出たら、そこに大きな木の鉢に湯が入ったのが置いてあった。

「さあ、この中にお入りなさい。」助手が又一つパチッとやる。豚はもうやつのことで、ころげ込むようにしてその高い縁を越えて、鉢の中へ入ったのだ。

小使が大きなブラッシをかけて、豚のからだをきれいに洗う。そのブラッシをチラッと見て、豚は馬鹿のように叫んだ。というわけはそのブラッシが、やつぱり豚の毛でできていた。豚がわめいているうちからだがつっかり白くなる。

「さあ参りましょう。」助手が又、一つピシッと豚をやる。

豚は仕方なく外に出る。寒さがぞくぞくからだに浸みる。豚はどうとうくしゃみをする。

「風邪を引きますぞ、こいつは。」小使が眼を大きくして云った。

「いいだろうさ腐りがたくて。」助手が苦笑して云った。

豚が又畜舎へ入ったら、敷藁がきれいに代えてあった。寒さはからだを刺すようだ。それに今朝からまだ何も食べないので、胃ももうからになったらしく、あらしのようにゴウゴウ鳴った。

豚はもう眼もあけず頭がしんしん鳴り出した。ヨークシャイヤの一生の間のいろいろな恐ろしい記憶が、まるきり廻り廻り燈籠のように、明るくなったり暗くなったり、頭の中を過ぎて行く。さ

さまざまな恐ろしい物音を聞く。それは豚の外で鳴ってるのか、あるいは豚の中で鳴ってるのか、それさえわからなくなった。そのうちもういつか朝になり教舎の方で鐘が鳴る。間もなくがやがや声が出て、生徒が沢山たくまやつて来た。助手もやつぱりやつて来た。

いよいよ豚の最期である。

「外でやろうか。外の方がやはりいいようだ。連れ出して呉れ。おい。連れ出してあんまりギーギー云わせないようにね。まづくなるから。」

畜産の教師がいつの間にか、ふだんとちがった茶いろなガウンのようなものを着て入口の戸に立っていた。

助手がまじめに入ってくる。

「いかがですか。天気も大変いいようです。今日少しご散歩なすつては。」又一つ鞭をピチツとあてた。豚は全く異議もなく、はあはあ頬ほおをふくらせて、ぐたつぐたと歩き出す。前や横を生徒たちの、二本ずつの黒い足が夢のように動いていた。

俄にわかにカツと明るくなった。外では雪に日が照って豚はまぶしさに眼を細くし、やつぱりぐたぐた歩いて行った。

全体どこへ行くのやら、向こうに一本の杉すぎがある、ちらつと頭をあげたとき、俄かに豚はピ

カツという、はげしい白光のようなものが花火のように眼の前でちらばるのを見た。そいつから億百千の赤い火が水のように横に流れ出した。天上の方ではキーンという鋭い音が鳴っている。横の方ではごうごう水が湧いてゐる。さあそれからあとのことならば、もう私は知らないのだ。とにかく豚のすぐよこにあの畜産の、教師が、大きな鉄槌を持ち、息をはあはあ吐きながら、少し青ざめて立っている。又豚はその足もとで、たしかにクンクンと二つだけ、鼻を鳴らしてじつとうごかなくなっていた。

生徒らはもう大活動、豚の身体を洗った桶に、も一度新しく湯がくまれ、生徒らはみな上着の袖を、高くまくって待っていた。

助手が大きな小刀で豚の咽喉をザクツと刺しました。

フランドン農学校では、鉄のハンマーで豚の額を強打して気絶させ、小刀でのどを刺して屠殺する方法がとられた。それは豚や牛の一般的な屠殺法だったが、現在は苦痛を和らげるために電気でシヨック死させるか二酸化炭素で窒息させる方法などに変わっている。いずれにせよ、そうなるど、もう食肉である。

一体この物語は、あんまり哀れ過ぎるのだ。もうこのあとはやめにしよう。とにかく豚はすぐあとで、からだを八つに分解されて、厩舎のうしろに積みあげられた。雪の中に一晚漬けられた。

さて大学生諸君その晩空はよく晴れて金牛宮きんぎゆうきやうもきらめき出し二十四日の銀の角、つめたく光る弦月げんげつが、青じろい水銀のひかりを、そこらの雲にそそぎかけ、そのつめたい白い雪の中、戦場の墓地のように積みあげられた雪の底に豚はきれいに洗われて八きれになつて埋うずまつた。月はだまつて過ぎて行く。夜はいよいよ冴さえたのだ。

金牛宮は占星術でいう黄道十二宮のひとつである。フランドン農学校の豚が殺された日の晩には、金牛宮がきらめき、弦月（半月）の光が雲にそそいだ。豚は八つに分けられて白い雪に埋められている。もちろん食肉の保存・熟成のためではあるが、こんもり盛り上がった八つの雪の塚は戦場の墓地のよう。その上を月はだまつて過ぎていき、夜はいよいよ静かであった。



地人館 E-books デモ版

*ページのレイアウト等は電子版と異なります。

大角 修 (おおかど おさむ)

1949年 兵庫県姫路市生まれ。東北大学文学部宗教学科卒。

(旬)地人館代表。仏教・日本文化史などを中心に編集・執筆活動を行う。

宮沢賢治研究会『賢治研究』編集委員

著書

『宮沢賢治の誕生』(中央公論新社)『イーハトーブ悪人列伝』(勉誠出版社)『仏教百人一首 万葉の歌人から宮沢賢治まで』(法藏館)『全品現代語訳 法華経』『全文現代語訳 浄土三部経』(角川ソフィア文庫)『法華経の事典 信仰・歴史・文学』(春秋社)『日本仏教の基本経典』(角川選書)『新日本の歴史』全5巻(小峰書店)など多数

みやざわけんかじ どう わ せん 宮沢賢治コミカル童話選 I

編著 おおかど おさむ
大角 修

初版発行 2021年4月2日

発行 ちじんかん
地人館

〒116-0014 東京都荒川区東日暮里6-56-6 長戸ビル3階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7937

<http://chijinkan.blog135.fc2.com>

©2021 Osamu Okado